

# ポエムの貌

No.127

絵を描くということは、自分がないものを付け加えていくことではなくて、自分にあるものを見つけて磨いていくこと。自分の良さを磨いていくことです。自分がないものを付け加えていくと、一見、見慣れた上手い絵ができ上がってくるかのように思ってしまうかもしれません。しかし、これは落ち着いて考えてみるとどんだん「他人の絵」になってしまうことなのです。

千住 博

※ 一九五八年東京都生まれ。東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。一九九五年ヴェネチア・ビエンナーレにて東洋人として初めて絵画部門優秀賞を受賞。

(千住博著『絵を描く悦び』光文社新書より)

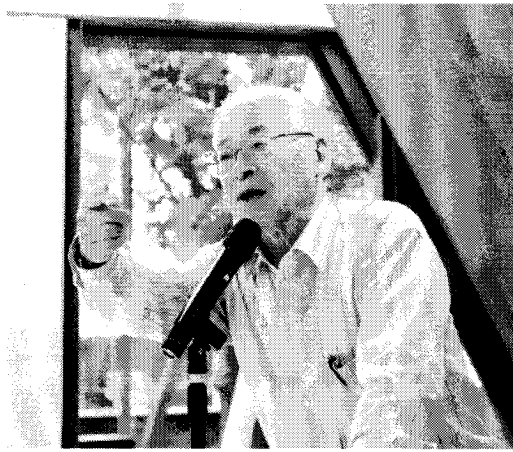
ぬかる道 Vol 22-7 平成 21 年 7 月号

七  
月  
号  
も  
く  
じ

巻頭言／愉しきかな吟行句会……………	江畑 哲男……………	2
とうかつメッセ……………	江畑 哲男選……………	4
とうかつメッセ《自選》……………		10
東葛川柳会五月句会……………		13
句会の表情……………	山本由宇呆……………	21
東葛川柳会五月吟行句会……………		23
深い森の中に迷い込んだ私……………	林 尚孝……………	30
東葛吟行会参加記／「森鷗外記念室」並びに「東大」への吟行会 新井季代子・後藤 松美……………		38
男の交差点⑦……………	小川 定一……………	40
UFOのハウリング【16】……………	山本由宇呆……………	41
「思いの丈」(十九)……………	川崎 信彰……………	42
団扇先生のジュニア川柳教室……………	植竹 団扇選……………	44
川柳達吟家のひと言集 26……………	斉藤 克美編……………	46
誌上課題吟……………	松岡 満三選……………	47
ビギナーズ道場……………	山本由宇呆……………	48
ぬかる道インフォメーション……………		53
風だより……………		54

# 深い森の中に迷い込んだ私

林 尚孝 (茨城大学名誉教授)



本日は、東葛川柳会吟行会にお招き頂き有難うございます。

ご紹介頂きましたように、私は農学部 of 学生として二年間、助手として四年半このキャンパスに通いました。五十年以上も昔のこと、この立派なセイホクギヤラリーや門の向側にある弥生講堂一条ホールなどは勿論ありませんでした。

折角の機会ですので、ご承知とは思いますが、少しこのキャンパスについてご紹介させていただきます。有名な旧制一高の寮歌「嗚呼玉杯に花受けて」はこのキャンパスで作られたものです。明治三五年、今から百七年前の第一二回記念祭に東寮寮歌として作られました。歌詞の中に「向ヶ丘にそそり立つ五寮の健児意気高し」とありますが、その「向ヶ丘」がここに当たります。駒場にあった東大農学部の敷地とこの旧制一高キャンパスとを、昭和一〇年に交換して出来たのがこのキャンパスです。本郷キャンパスは当初上野の杜に計画されましたが、オランダ人医師のボードウィン博士が反対し加賀藩邸跡に決まりました。この弥生キャンパスは水戸藩邸跡に当たり

ます。私が勤務していた当時は、本郷キャンパスと弥生キャンパスは言問通りで隔てられておりました。今は、両キャンパスを結ぶ陸橋があり、学内での通称「ドーバー海峡」は海底トンネルではなく陸橋により結ばれています。当時は、農学部正門を入り右手の一号館、左手の二号館、突き当たりの三号館と応用微生物研究所だけがあり、実に広々として、風情がありました。その後地震研究所が建てられたり、農学部図書館など多くの建物が新築されるなどで、すっかり狭苦しく変わってしまいました。

さて、今日の演題は、「森の中に迷い込んだ私」となっていますが、この「森」は「森林太郎」「森鴎外」のことです。今日の話題につきましてはレジメをお配りしていますが、波線で囲んだ三つの話題についてお話ししようと思っております。

第一に、何故農学研究者が森鴎外の世界に引き込まれたのか。

第二に、今日の吟行会の出発点になった「観潮楼」などについて、鴎外にまつわる話をしたいと思います。

第三に、余り知られていない鴎外の秘められた恋についてお話しします。この話は、十年前の私を聞き手、すなわち鴎外について全く白紙状態の人を想定してお話したいと思えます。というのは、その頃の私は、若いドイツ人女性エリーゼ・ヴィーゲルトが鴎外を訪ねて来日し、三六日間も築地精養軒に滞在した事実を知らなかったからです。この女性は今もって謎とされていますが、私どもの研究成果を含めて手短かに話します。

## なぜ森に迷い込んだのか

第一の話題ですが、レジメにありますように私の博士論文は「息角による粉粒体物性の確率論的研究」であり、私の専門は農業機械です。なぜ、農業機械の研究で粉粒体が出てくるのかと言

いますと、米、麦、大豆を始めとする穀類やその粉、肥料、農薬などの粉粒体を農業機械は扱います。粉粒体は実に厄介な性質を示し、「粉体魔物説」が学会誌に載るほど取扱が難しいことが知られており、それを一般化しようという研究でした。流動性の指標すなわち流れやすさの物差しと考えられていた「安息角」について豊浦標準砂などを使って実験を重ねました。粉粒体の挙動の複雑さは、結局低圧領域での摩擦現象の特異性にあることを実験的に証明し、博士論文としてまとめました。

そのような理系の研究者が、森鷗外の世界に迷い込んだのは全くの偶然の結果です。医者であった私の父は、私が子供の頃から小説を読むことを固く禁じました。とくに、新聞の連載小説は頭が悪くなるぞなどと脅し、私はその「読書禁止令」を忠実に守ってきました。今振り返って見ますと、父は私が文系に進みたいなどと言いだすのを警戒していたのではないかと思えます。そんなことから、森鷗外の作品も、「舞姫」、「雁」や「山椒大夫」などくらいしか読んでいませんでした。それが十年前の私です。その状態の私に説明すると想定して話を進めたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

夢にも思わなかった森鷗外との出会いは、今から七年半前の二〇〇一年十一月十五日にやってきました。正確には翌日の十六日早朝のことです。十五日に帰宅した所、諏訪清陵高校の三年後輩小平克氏から分厚い封筒が届き中から原稿が出てきました。どういふ訳か午前三時頃に眼が覚め、半角フォントを使いぎつちり文字が詰まったワープロの読みにくい原稿を我慢して読み始めました。そこには、エリーゼ・ヴィーゲルトが取り上げられており、鷗外は彼女と結婚するつもりであったこと、エリーゼを帰国させる際に軍医の辞表を提出したのではないかという想像すら出来な

い仮説が書かれておりました。レジメの三行目にある小平さんの「エリス事件異説」がそれですが、一気に読ませる内容でした。私はこの事件については白紙状態でしたので、驚いたことを思い出します。しかし、その仮説はキチンとした論理に裏づけられており、荒唐無稽だとは考えませんでした。

ところが、レジメにありますような四人の有名な鷗外研究者——平岡敏夫、山崎一穎、山崎國紀、吉野俊彦という有名な専門家から、小平説を否定するコメントが寄せられました。小平さんは、著名な研究者がキチンと手紙を下さったことで満足であると言われました。それを聞いた私は、間違っているのは鷗外研究者の方で、小平説は正しいと思うと言い、小平説を裏付けるような指摘を二つほど付け加えました。これが、私が森の中に迷い込む原因となった訳です。小平さんの研究成果は、二頁にある資料一の最初に挙げてあります『森鷗外論』です。「おうふう」という出版社から刊行されることは、国文学者として大変名誉なことだと言われていきます。しかし、この著書は約八千円と値段が高い上、学術的に過ぎ素人が読むのは大変だから、普及版を出すようにと小平さんに勧めました。しかし、小平さんはそれを拒まれ、私に出版を勧めて下さいました。それで私が『仮面の人・森鷗外』（同時代社）を書き、二つの著書がほぼ同時期に刊行された次第です。

二人三脚ともいえる鷗外研究に私が幾分貢献できたとすれば、「専門家の言より、小平さんの論理が正しい」と判断したことだけでした。その後、小平さんは「我百首」に関する著書を出版されました。これまで、鷗外研究者が匙を投げていた「我百首」について見事な解釈を示されました。しかし、小平さんは専門家との論争を嫌い、私がスポークスマンとして、二頁の資料一にありますように、森鷗外記念会の『鷗外』や『通信』に投稿を続けてい

る次第です。

### 「猫の家」・観潮楼と森鷗外

さて、今日は吟行会で、観潮楼を出発し、藪下通りから、根津神社、東大キャンパスと歩いてきましたので、この周辺の鷗外関係の話、とくに「猫の家」と「観潮楼」についての話をいたしません。鷗外が、観潮楼に三十歳から六十歳で亡くなるまで住んでいたことは知っておりました。しかし、夏目漱石が住んでいた駒込千駄木町五七番地の家、漱石が「吾輩は猫である」を書いた俗に「猫の家」といわれる家に鷗外が住んでいたことは知りませんでした。鷗外は、漱石が住む十年程前にこの家に住んだことがあり、「千朶山房」と名づけていました。

実は、私にとってこの駒込千駄木町五七番地は忘れることが出来ない番地です。当時この番地に家内の母の姉に当たる伯母の家があり、学生だった家内が寄宿していました。さらに、私が農学部で助手をしていたときには、家内の母の妹に当たる叔母が駒込千駄木町一番地に住んでおり、私も親子三人が、叔母の家に寄宿させて貰い、そこから東大農学部に通いました。現在「猫の家」の跡地は、日本医科大学の施設になっており、家屋は犬山の明治村に移されています。現在では向ヶ丘二丁目になっていますが、当時は駒込千駄木町五七番地で道を挟んで同番地でした。私の青春と切っても切り離すことが出来ない思い出深い番地です。

### 鷗外は家出して「猫の家」に移る

森鷗外が「猫の家」に住んでいたことを知ったのは、森鷗外研究を始めてからです。しかも、鷗外が当時新婚生活を送っていた上野不忍池近くの花園町にある家を、第二人を伴い家出して住ん

だのが、この「猫の家」でした。鷗外は、明治二二年二月に、赤松登志子と結婚し、赤松家の持ち家である花園町の家で、鷗外の第二人、登志子の妹二人とともに暮らしていました。現在から見れば考えられないような新婚生活です。この家は、現在水月ホテルの中に「鷗外荘」として残されており、会食などの会合に使われています。現在は平屋ですが、当時は二階建てであり、この家で「舞姫」や「うたかたの記」などが生まれました。

ところが、翌明治二三年八月、臨月の登志子をよそ目に、信州山田温泉に一七日から二七日まで鷗外は旅行しています。山田温泉は今でも不便な所であり、鉄道が横川までしか通じていなかった当時よく鷗外はこんな辺鄙な所に行ったものだと思います。この時の様子は「みちの記」で見ることができませんが、交通の不便なことや男女混浴の様子、宿の食事など当時の様子が生き生きと書かれており、見事な紀行文だと思います。

信州山田温泉から帰り、九月十三日には長男森於菟が生まれますが、何と十月四日に第二人を連れて家出し、千駄木町五七番地に引越しています。これには周囲は驚かされ、何とか思い直させようと努力しますが、結局十一月二日に正式な離婚をしています。一年八カ月の結婚生活であり、赤松登志子には本当に気の毒なことで、非は鷗外にあると思います。

### 子規・緑雨・鷗外の垢

この時期の鷗外の生活ぶりについて、森於菟は『父親としての森鷗外』の中に、いろいろなエピソードを書いています。その中に「子規 緑雨 鷗外の垢」があります。

多分明治二十四五年頃、駒込千駄木町五七番地での出来事であろうとして次のように書いています。

子規ははなはだ不精者であつたと見えて、常に垢を蓄えては根岸の里から千駄木に運んでその臭氣に綺麗好きの私の祖母を辟易させたらしい。話に興が乗ると胸から腹の辺りが痒くなると見えて右手を深く懐に入れてこするのである。かくして製造せられる垢の団子を拇指の腹にのせて示指で弾くのでそれが対座している父の膝に落ちたり、時として火鉢に入つて室内に異臭を漲らせた。ある時勢いよく発射された弾丸が丁度茶を運んできた祖母の額に命中したというのが私が直接祖母から聞いた話である。

これは観潮楼での話として斎藤緑雨について書いています。観潮楼にありました「三人冗語」(樋口一葉を世に出した森鷗外、幸田露伴、斎藤緑雨)の一人です。バサバサした髪が長く額にかぶさっている下に蒼黒い瘡せた顔の中から眼ばかり光らせている緑雨から、画札(軍人、船、花や動物)を貰つて喜んでいたところ、祖母に汚いからと取り上げられ、火にくべられてしまった。結核菌の伝染を恐れた祖母の仕打ちだったと思うと書いています。

意外なことに鷗外は生涯風呂嫌いだつたようです。

私の父が湯に入らぬ事は有名で、朝起きてからすぐと夕方役所から帰つてから二回、蓮の上に真鍮の金盥と湯沸と大形の口嗽ぎをおき、蓮のうえにあぐらをかき嗽ぎ、湯を金盥に移して上半身だけ肌をぬいで全身を拭う。汚水はバケツに捨てる。一滴の水も蓮の外にこぼさない。手拭は一つで顔をふくのも股の間を拭うのも同一である。「おれのからだに汚い所はない」と鷗外は書いていて、すこぶる自信の強い男であつた、と於菟は回想しています。

その後駒込千駄木町二一番地に千住から森一家を呼び寄せて団子坂上の「観潮楼」を建て、死ぬまで三十年間住みました。遺族から文京区に寄贈され、本郷図書館森鷗外記念館として活用されてきました。しかし、老朽化が進み昨年四月に突然閉館され、二

〇〇二年の鷗外生誕百五十周年には新築開館される予定です。

「猫の家」と「観潮楼」について紹介しましたが、レジメにも書きましたように鷗外はこの界限で散歩を楽しんでいました。森まゆみの『鷗外の坂』にはさらに詳しい紹介があります。

#### 鷗外の秘められた恋と「舞姫事件」

時間がありませんので、この辺で最後の話題である「鷗外の秘められた恋」について移ろうと思います。

初めに、「舞姫事件」についてお話ししておかなければなりません。「舞姫事件」という用語は小平さんと私が主張しているだけで、一般的になつてゐる訳ではありません。

具体的に、「舞姫事件」について説明しますと、ドイツ留学から鷗外が帰国した明治二年九月から、「文づかひ」を発表した明治二四年一月までに起こつた事件を総称するものです。すなわち、ドイツ人女性エリーゼ・ヴィーゲルトの来日、赤松登志子との結婚と離婚、初期三部作「舞姫」、「うたかたの記」、「文づかひ」の発表、『東京医事新誌』主筆罷免問題、その後の戦鬪的な言動など全ての事件を含めます。華やかな門閥の令嬢赤松登志子との離婚は、鷗外の出世にも関わる大事件です。二足の草鞋を履く習慣のなかつた当時に、小説を公表したこと、しかも「舞姫」のような内容の小説を発表したこと。上司や恩師に楯突く論評を掲載し、主筆を罷免されたこと。そのどれ一つ取つても大事件なのに、さらに謎のドイツ人女性が来日しています。「舞姫事件」については、これまで系統的な探究がされておりません。私どもは「鷗外はエリーゼと結婚するつもりであつた」という仮説のもとに系統的に「舞姫事件」に取り組んでいます。

## 「エリーゼ来日事件」

「舞姫事件」の中でも、もっとも謎が多いのが「エリーゼ来日事件」です。赤松登志子との離婚事件の背景には、この「エリーゼ来日事件」が影響していると私どもは考えています。

それはさておき、鴎外の初期三部作とくに「舞姫」には、鴎外のドイツでの恋愛体験が盛り込まれていると思われており、そのモデルを巡りいろいろ憶測がされてきました。

ところが鴎外の死後十数年経ってから、鴎外の長男森於菟と次女小堀杏奴が来日ドイツ人女性について触れました。於菟は、「扣鈕」に詠まれている「こがね髪ゆらぎし少女」が鴎外が愛した女性ではないかという随筆を書き、この女性を横浜で説得し帰国させた、と発表しました。杏奴は女性に対して恬淡としていた父鴎外の「永遠の恋人」ではなかったかと書きました。これを読んだ鴎外の妹小金井喜美子が鴎外の名誉を守ろうとしたのだと思われるのですが、「森於菟へ」と「次ぎの兄」を発表します。これには、来日した女性の名前は「舞姫」のヒロインと同じエリスであること、「舞姫」に書かれているように小柄で美しい女性であること、築地精養軒に滞在し、帰国に際しては鴎外と「次ぎの兄」の篤次郎、夫小金井良精の三人が横浜で見送ったことを公表します。ただ、この他にもエリスは「鴎外に財産があると唆されて来日した少し頭の足りない」「路頭の花」のような女性であると書きました。貧しく、少し頭が足りない、行きづりの女と書きましたが、このような女性と交際する鴎外の品性をも貶める内容であると思います。しかし、鴎外の妹小金井喜美子の「次ぎの兄」は長い間、研究者の間では事実と信じられてきました。

ところが、一九八一年五月に、一八八八年当時の週刊英字新聞に鴎外の帰国とエリーゼ・ヴィーゲルトの来日と離日の船客名簿

の記事が発見され、初めて来日女性の名前と来日日時が確定しました。女性の名前はエリスではなくエリーゼであり、小金井喜美子の記述に疑問が持たれるようになります。しかし、このエリーゼがどのような女性であったのかは、現在もまだ謎に包まれています。

私どもは、エリーゼを結婚のために鴎外は招いたと考えています。しかし、そのように考える研究者はまだ少ないのが現状です。私どもがそのように考える理由は次のようです。

まず、鴎外は一八八八年七月二九日にマルセーユを出航し、九月八日に横浜に帰着しています。ところがエリーゼは七月二五日にドイツのブレーマーハーフェンを出航し、九月十二日に横浜に到着しています。当時の船便は月に三〜四便しかないのに、鴎外より四日前に出航し、四日後に横浜に到着したことは、二人が打合せをしたとしか考えられません。また、鴎外は七月五日にベルリンを出発しアムステルダム、ロンドンを回り、パリに立ち寄ったのですが、その鴎外に七月二六日にエリーゼから出港を知らせる知らせが届いている事実があり、鴎外が彼女にパリの滞在ホテルを知らせていたことが分かります。何よりも、当時の旅費は一等船客で六百円くらい要しましたが、鴎外の留学費は年間千円、のちに値上げされ千二百円でした。貧しい女性が、未開発国の日本に多額の旅費を払ってやってきて、往復の船賃を上まわる代償を得ることはあり得ないと考えられるからです。

「扣鈕」と「我百首」に見る鴎外のエリーゼへの想い  
また、鴎外は帰国したエリーゼと文通を続けていたことが知られています。先ほど触れました「扣鈕」の詩を、ご紹介します。

南山のたたかひの日に／袖口のこがねのぼたん  
ひとつおとしつ／その扣鈕惜し

べるりんの都大路の／ぱつさあじゆ電燈あをき  
店にて買ひぬ／はたとせまへに

えぼれつとかがやきし友／こがね髪ゆらぎし少女  
はや老いにけん／死にもやしけん

はたとせの身のうきしづみ／よろこびもかなしびも知る  
袖のぼたんよ／かたはとなりぬ

ますらをの玉と砕けし／ももちたりそれも惜しけど  
こも惜し扣鈕／身に添ふ扣鈕

明治三十七年五月二六日の日露戦争・南山の戦いは、大連市金州郊外で行われ、戦死者七一九名、負傷者三五二六名を出す大激戦でした。乃木大将の長男勝典中尉もここで戦死しています。乃木希典の有名な漢詩「金州城外斜陽に立つ」もここで詠まれました。四十二歳の鷗外が、南山の激戦で失くしたカフスボタンを、百人・千人の兵士の命と同様に惜しいと詠んでいるのは、「こがね髪ゆらぎし少女」との「はたとせまへ」のベルリンでの思い出があるからだと思います。森於菟や小堀杏奴の言うとおりに、ここに詠まれているエリーゼは鷗外の「永遠の恋人」であると思います。

また、レジメの「我百首」のようにエリーゼとの思い出を詠んだと思われる短歌百首を四七歳の時に詠んでいます。第一首の「斑駒の骸をはたと抛ちぬ Olympus なる神のまどるに」、第二首

の「もろ神のゑらぎ遊ぶに釣り込まれ白き齒見せつ Nazareth の子も」から分かりますように、難解きわまる歌が続いています。

第二六首の「すきとほり真赤に強くさて甘き Nescioree の酒二人が中は」。ワインを詠み込んだこの短歌は、エリーゼと鷗外の二人の仲を詠んでいることは明らかだと思います。

「我百首」は鷗外研究者を悩ませ続けていました。鷗外の遊びだろうという解釈などがありました。それはエリーゼと鷗外の恋を、これまでの研究では究明していなかったためと考えています。小平克さんは『森鷗外「我百首」と「舞姫事件」』（同時代社）で「我百首」を見事に解説しています。

さらに、於菟は後に祖母峰子が「お前を母なし児にしたのはあの子を追いつ返したためだ」と話した、と書いています。

#### 鷗外はエリーゼと結婚するつもりであった

このように見えますと、鷗外とエリーゼは相思相愛であり、結婚を目的でエリーゼを招いたと考えてよいと思います。しかし、現在でもこのように考える鷗外研究者は少数です。しかし、赤松登志子との離婚事件一つ取ってみても、「エリーゼ来日事件」が深く関わっていると思われ、「舞姫事件」の究明には、エリーゼがどのような人物であったかを知ることが重要です。

今日は時間がありませんので、鷗外がエリーゼと結婚するため彼女を日本に招いたけれど、彼女は築地精養軒に三六日間滞在したものの、家族の強硬な反対にあつて帰国したという私どもの説をご紹介しますに留めます。

なぜ、それでは鷗外がエリーゼを招いたのかというような話は別の機会に譲りたいと思います。また、レジメにありますように、エリーゼはこれまでベルリン出身の女性と考えられてきましたが、

ミュンヘンで鴉外がダンスを習った女性であるという新しい説を提出しています。また、エリーゼがユダヤ人であったというような根拠もない説が信じられてきましたが、彼女はユダヤ人ではないという論証もしています。興味のある方は、これらに關しての拙論をお読み頂ければ幸いです。

### 「舞姫」に見る「恨」と「エリーゼ来日事件」

鴉外の処女作と言われる「舞姫」は、近代小説の嚆矢となる作品であるといわれ、今もって愛読されています。

その粗筋は、エリート留学生太田豊太郎が舞姫エリスと知り合、上官から疎まれて留學費を打ち切られ、困窮した状態でエリスに救われ貧しい中にも楽しい同棲生活を送る。しかし、妊娠したエリスを狂わせ、出世のためにがしかの金を置いて帰国してしまふ。まことに身勝手な男の悲恋物語となっています。

どうして鴉外は、赤松登志子と結婚したばかりなのに、このような小説を書いたのでしょうか。

「石炭をば早や積み果てつ」で始まる「舞姫」の冒頭部分に次のように小説を書く目的が書かれています。

嗚呼、いかにしてかこの恨を銷せむ。若し外の恨なりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すがすがしくもなりなむ。これのみは余りに深く我心に彫りつけられたればさはあらじと思へど、今宵はあたりに人も無し、房奴の来て電氣線の鍵を振るには猶程もあるべければ、いで、その概略を文に綴りて見む。

文に綴るのは「この恨を銷」するためであると明確に「目的」を書いています。この「恨」は、詩歌に詠うことで消すことができそうにもないものなので、これも成功するかどうかはわからな

いが、「恨」を消すべく、その概略を綴ってみようというのです。この「恨」の大きさを「腸日ごとに九廻す」とも書いています。

「エリーゼ来日事件」に対する私どもの見方からすれば、この「恨」は「エリーゼに対する裏切りを行った自分自身への恨みである」ことは自明です。すなわち、「怨恨」ではなく、「悔恨」です。悔恨よりも深い感情を「恨」と表現していると思います。鴉外の深い悔恨の情とともに自分自身を告発した小説として「舞姫」を読むことが出来ると思います。同時に、そのような弱い自分との訣別の意志を固め、登志子との離婚を視野に置いた作品としても受け取ることが出来ると考えています。

### 森の中に迷い込んだ林

最後に、「森の中に迷い込んだ林」について、現在の心境をお話ししておきます。

十年前の私は、森鴉外を明治の文豪であり、日露戦争で多数の脚氣患者を出した軍医という認識くらいしかありませんでした。

十年経って、その認識は大きく変わりました。レジメにも書きましたように、多分野において傑出した巨人であり、現在の日本文化に対して大きな貢献をしたと考えています。医師、文学者、批評家、啓蒙家として大きな足跡を残しています。

加藤周一は、『日本文学史序説』で文学での鴉外の貢獻について記しています。五項目、すなわち、(一)翻訳による西洋文学の紹介、(二)小説で扱った人物と主題の多様性、(三)叙情詩における若い詩人への影響、(四)日本語の散文の一つの文体を完成、(五)伝記三作の形式提示。文学者として傑出した点が挙げられています。その鴉外が青年時代にエリーゼ・ヴィーゲルトと激しい恋をし、



その恋を破られて「舞姫」「うたかたの記」「文づかひ」などの小説を書き、「扣鈕」や「我百首」の中にその想い出を書き残していると思います。当初抱いていた理知的で男性的な立派な軍人というような鴎外のイメージは薄れ、現在では、悩み多き青春を生き、それを糧として日々精進を続け、後の世に多くのものを遺したまさに「類い希な巨人」だと思っています。

### 「横浜開港百五〇周年祭」と森鴎外

今年は横浜開港百五十年に当たり、四月二十八日から九月二十七日まで「横浜開港一五〇周年祭」が行われています。神奈川県近代文学館では六月七日まで「森鴎外展」が開かれています。先日見学してきましたが、実に立派な展示がなされておりました。

鴎外は百年前、すなわち開港五十周年に横浜市歌を作詞したほか、Y高すなわち横浜商業校歌も作詞しています。鴎外に関心のある方は、是非この機会に見学されることをお勧めし、本日の短い話を終わることにいたします。

ご静聴有難うございました。

### ○ 著書

小平 克著『森鴎外論―「エリーゼ来日事件」の隠された真相―』、おうふう、二〇〇五年四月

林 尚孝著『仮面の人・森鴎外―「エリーゼ来日」三日間の謎』、同時代社、二〇〇五年四月

小平 克著『森鴎外「我百首」と「舞姫事件」』、同時代社、二〇〇六年七月

### ○ 森鴎外記念会誌『鴎外』連載論文

(1) 「舞姫事件」研究の意義とその重要性―「舞姫」考(その一)―

『鴎外』第八一号、三三〜四六頁、二〇〇七年七月

(2) 来日ドイツ人女性はエリーゼ・ヴィーゲルトである―「舞姫」考(その二)―、『鴎外』第八二号、五一〜六六頁、二〇〇八年一月

(3) エリーゼはミュンヘンの「舞師」である―「舞姫」考(その三)―、『鴎外』第八三号、三四〜四九頁、二〇〇八年七月

(4) エリーゼはユダヤ人ではない―「舞姫」考(その四)―、『鴎外』第八四号、四〇〜五五頁、二〇〇九年一月

### ○ 森鴎外記念会機関紙『森鴎外記念会通信』掲載論文

(1) 「我百首」をめぐって―フォガツツロの小説と第二六首―、『通信』一五六号 秋、五〜六頁、二〇〇六年一〇月

(2) 「小金井日記」に驚くべき記述を発見―エリーゼ来日事件の新証拠となりうるか―、『通信』一五八号 春、二〜三頁、二〇〇七年四月

(3) 鴎外、軍医辞職説の裏付け資料―『小金井良精日記』に新発見の記述―、『通信』一六〇号 秋、六〜七頁、二〇〇七年一〇月

(4) エリーゼはミュンヘンの「舞師」だった―「獨逸日記」のへ踏舞歌応囀を讀み解く、『通信』一六一号 冬、二〜三頁、二〇〇八年一月

(5) 「築地西洋軒」を讀む―山田風太郎のエリス像―、『通信』一六二号 春、七〜九頁、二〇〇八年四月

(6) 古戦場「南山」を訪ねて、『通信』一六三号 夏、七〜八頁、二〇〇八年七月

(7) 荻原雄一氏に答え、かつ問う、『通信』一六四号 秋、六〜七頁、二〇〇八年一〇月

(8) ミュンヘン駅頭の怪―横山又次郎とエリーゼ―、『通信』一六五号 冬、三〜四頁、二〇〇九年一月

(9) 伯林の鴎外、第三の下宿の謎、『通信』一六六号 春、八〜九頁、二〇〇九年四月